所属：鳥羽商船高等専門学校　一般教育科

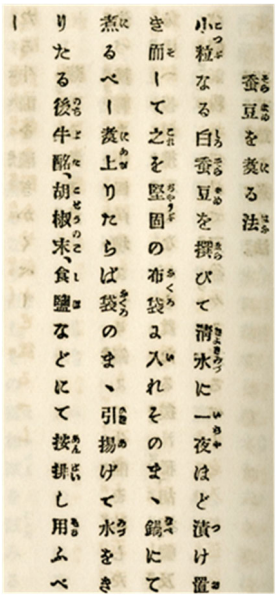
研究タイトル：

文字・表記の言語学的分析

氏名：	ショーン・ニコルソン　／　Sean Nicholson	E-mail：	nicholson-c@toba-cmt.ac.jp
職名：	講師	学位：	博士（文学）
所属学会・協会：	日本語学会、国文学言語と文芸の会、日本近代語研究会		
キーワード：	言語学、日本語学、表記、英語学史、日本語学史		
技術相談 提供可能技術：			

研究内容：明治前期の文字・表記の日本語学的・計量的分析

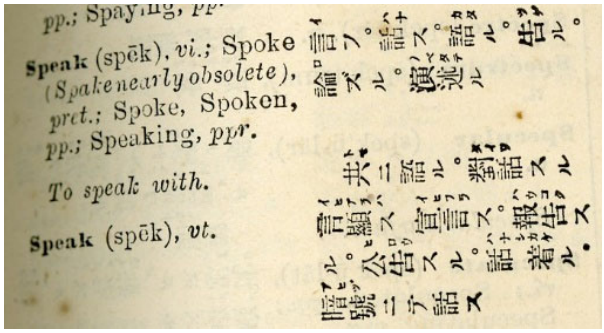
明治時代の文献に接する際、現行の日本語の文字・表記システムと異なる要素・用法が目につきやすい。異なる点は字体、仮名づかい、句読点などに及ぶ。ふりがな一印刷用語で「ルビ」とも呼ばれる要素の多用も目立つが、その使用量のほかに、その質も多様性を呈している。



『手軽西洋料理法』明１３

左は明治１３年に出版された料理書の一項目である。「清水」という本行の文字列に振られたルビは「きよきみづ」とあり、通常の「よみ」と考えられる「せいすい」「きよみず」「しみず」のどれにも合致しない。「堅固」に「ぢやうぶ（丈夫）」、「布袋」に「ふくろ」、「牛酪」に「ばた（butter）」、「食塩」に「しほ」となっているように、短い文章であるにもかかわらず、「よみ」の範囲におさまらないルビの実例が多い。

右は明治１９年に出版された英和辞書『［附音插図］英和字彙』の「Speak」項目である。「演述ル」の漢字列に「ノベタテ」というルビがつき、また「宣言ス」に「イヒフラ」を振り、「言い触らす」ということばが対置されている。



『［附音插図］英和字彙』明１９

文字と言語の対応に恣意的な側面があり、なおかつ可変的なものでもある。現行の文字・表記のシステムにおいて、「堅固」に「じょうぶ」という「よみ」としてみとめられないが、同時代に観察できる「麦酒」という文字列に「ビール」というよみかたが定着にいたった。

「堅固」を「ぢやうぶ」とよむことがあとに時代に採用されていなかったが、当該時代において一定の慣用性を有していなかったと断言できない。文献の横断的調査により、その慣用性・特有性を計量的に検討し、共時態のありようの一端を解明してゆく。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）	